

災害ボランティアで考えたこと

著者	中川 泉
雑誌名	NICかわらばん
巻	183
発行年	2004-10-03
URL	http://hdl.handle.net/10631/697

看護大通信

1



基礎看護学 中川泉

七月十三日に始まった三条見附豪雨災害は、テレビで刻々全国に伝えられ、新潟県在住というだけで、県外からの心配の電話をもらった人は多かったのではないのでしょうか。

今回、私にとって、災害ボランティアは初めての経験だったわけですが、現地に行くことの重みを改めて感じました。災害が個々の生活にどのような影響を与えるのか、八十歳の女性が語ってくれた話が象徴的でした。その中の二つの話。「私の着物は全部日本海へ流れていつてしまった。涼しくなったので長袖がほしい。避難所に届いた衣類から良さそうな物を選んでほしい…」。家財を失うことは大変なことですが、それらがもっている思い出や歴史も失う感じがしてとても寂しい経験となるのではないのでしょうか。

また、避難所セットというものをお初めて見ました。薄く狭い敷きマット、薄い毛布、シート、ビニールの空気枕、靴下、スリッパ等が入っていました。災害で着の身着のまま避難すると、その夜から寝具・水・食料・着替え・トイレは確保しないと生きていけないことが避難所にいる

災害ボランティアで考えたこと

とリアルに感じられました。さらに、避難所での生活をみると、被災直後、一週間、長期間と時間をおって生活の支援ニーズが変化するように思われました。

先日、岩室村に行ったのですが、温泉組合の方々が、何台かの車で被災者を迎えに行き、岩室村までお連れして、温泉に入ってもらい、食事をお出しして数日支援したという話をききました。みなさん本当に喜ばれたそうです。また、新潟市のボランティア「うちの実家」では、日ごろのネットワークを生かし、国際福祉医療カレッジの教員と学生、新潟市の保健師等の協力も得て、避難所におられた宅老所の高齢者ら五人を受け入れたそうです。家庭料理、静かに保たれたプライベートな居間、個別のケアプランに基づく援助、理髪のボランティアまで加わり、九日後には、皆さん、以前よりもお元気になって帰られたと報告しています。こうした経験から、今後、被災地の近隣の様々な組織がボランティアセンターの役割を担い、いざという時に有効な資源として活躍するようになると思っています。